

<p>事例 教育力の強化</p> <p><b>教育改善と教育力の強化による就職実績の向上</b></p> <p>～金沢工業大学～</p>	<p>本事例の中心人物</p> <p>事務局職員</p>
--	------------------------------

**事例内容**

**【概要】**

金沢工業大学は、教育方法や教育内容を絶え間なく改善することによって、学生の実力を伸ばし、よい企業に就職させている。

**【背景】**

同大学は、地方、単科大学、女子が少ないという不利な条件に加え、地元約1,500人の就職先がないという状況の中で、大学の特色を出すことによって全国から学生を集める必要性に迫られていた。

**【取り組み内容】**

- ・現在は、大学の名前で就職できる時代は終わり、企業は学生の個々の力で判断するようになった。企業側も良い人材が欲しいので、その学生が持っている素養で観るようになってきたのである。そうした状況の中で、同大学は、教育の結果とは学生が就職できることだと考え、「教育付加価値日本一の大学」を目指して絶え間ない教育改革を実施している。
- ・「学生が来なくなれば、大学ではなくなります。また、来てくれた学生の中に不満があるようでは大学の機能が不完全と考えられます。」ということで、教員には学生の教育を第一優先にしてもらうような体制をとっている。学生の個々の力が落ちていくと考えるのではなく、学生をいかに支援できるかを教職員は考えている。また、教員の個人的な研究に対しては、外部評価を積極的に求める取組と共に、外部資金の獲得に力を注ぐように言っている。

- ・このような体制になったきっかけは、平成3年に数名の教職員がアメリカに視察したことにある。まず教育があってその延長線上に研究があることが明確になり、そこから同大学の教育改革が始まったという。どうすれば教員がきちっと教育していけるか、どうすれば学生が興味を持って授業を聴くか、アメリカの ABET の Engineering Design 教育を参考にして動き始めた。この大学の特徴は、個々の教員の力に頼るのではなく、全学的、組織的に展開したことである。
- ・一つの取組みから、どう多面的に発展させるか。その中で独自性と強みをどう生かしていくか、PDCA (Plan, Do, Check, Act) サイクルで発展させていった。特に、「評価」の部分では、教育点検評価部という部門できちんと評価している点がユニークである。評価・改善の繰り返しの中で、今まで見えなかったものがしだいに増えてきたそうである。同大学の強みは、教職員の交流が深いことであり、「学生のために何をやったらダメというタブー」がなく、教職員も「できることを見つけたら提案してみる」というボトムアップの伝統があることである。
- ・こうした活動の中から様々な教育改善が行われてきた。たとえば、学生が教えてもらいたいと思ったことに瞬時に対応する教育支援システムとしては、工学基礎教育センターがあり、利用者は、平成17年で延べ約1万5千人に上るといふ。工学基礎教育センターでは、基礎教育担当の教員が随時家庭教師のようにマンツーマンで質問を受け付け、補習などを行っている。この補習教育の成功実績に基づき、これを更に専門教育に拡大していく計画を現在立て

ている。年間延べ約9万5千人の学生が利用するという夢考房、さらに16チームの夢考房プロジェクト活動、平成15年から平成18年まで毎年取得している特色GPや現代GPなどの補助金も、学生と教職員の創意工夫による取組をした結果である。また、授業についても定期試験をなくすというユニークな改革をしている。定期試験のみで評価するのではなく、課題を中心に学生が教育の中味として何を確認できているかなどの複眼的な評価を実施している。それが、レポートと課題が日本一多い大学といわれるゆえんであろう。

- ・このような大学側の教育改善に対して学生側もきわめて積極的である。「宿題がいっぱいあって大変だが、他人の文章を真似していたのはまずいのではないか」ということで、学友会で決議して「学生宣言」を出している。以上のことからこの大学には学生・教職員・理事の信頼関係が深く根付いていることが伺える。

### 【結果】

昨年、朝日新聞で行った全国427大学学長を対象としたアンケート調査で、教育分野で1位、就職指導で2位の評価を得るほど、学生に対する面倒見のよい大学、就職実績の高い大学との評価が全国的に定着した。

### 成功のポイント

同大学には、学生募集のノウハウを聴きに行ったが、「学生募集単独では考えていませんし、特別なことも何もやっていません。今人気の看護系でも集まっているところと集まらないところがあります。企業でも売れるメーカーと売れないメーカーがあります。ですから、理工系離れにもあわてることはありません。工学部ということではなくて、大学としての魅力を作るように努力していただくだけです。」ということであった。入試改革や学生募集のテクニックだけ

で学生を集めるのではなく、教育の内容をいかに学生に、より分かりやすく伝えることに努力しているかということである。教育の中味をしっかりと知ってほしいために、入学案内は他の大学と比べてかなり厚いものになっている。学生が集まらなくなったからといって、すぐに改組転換だけを検討している大学もあるようだが、それだけではないだろう。絶え間ない教育改善をして、すぐれた教育内容を受験生に忠実に伝えることが成功のポイントだと思われた。

### 今後の課題

社会の高い評価に安住することなく、社会から信頼され必要とされる大学となるべく、教育に対する高い改善意欲をどう持続していくことができるか、それが今後の大きな課題であると思われる。

### 委員の所感

理事会が明確な方針を出し、教職員が一致協力して遂行し、そして学生が変わるという見事な事例である。「大学が大切なのは、オープンになること、隠すことは何もありません」という企画調整部長の言葉が、同大学の強みをあらわしているように思われた。